たり、よく局の窓口に顔を出すので、その窓口に座っている利幸君を連絡係にしたのである。

利幸君から、先生の都合の日が知らされ、日時が土曜日の午後に決定された。嘉瀬の駅に午後二時ごろ、沢田薫さんと利幸君と私の三人が迎えに出た。

近道を行こうというので、津鉄の線路を歩いた。切り割り（切り通し）に入った線路を跨たぐ跨線橋、木の橋で一番橋から三番橋まである。

その一番橋から斜めに上って、上の農道に出た。先ず木立のりんご園へ寄ったが、木立さんは居なかった。みんなで腰をかがめてりんごの樹の下を見通したが、一町三反歩の面積の園地で木立さんの姿をとらえることが出来なかった。仕方なく私たち四人は憭さんの家へ向かった。

中柏木の部落は、原田の名字が多い。次に成田、杉山と続くが、原田の総本家は原田憭さんで十三代目と言われている。

原田家へ着くと、憭さんとお母さんが玄関で待ち受けていた。小柄な憭さんのお母さんは、丁重にあいさつし、奥の座敷に招じ入れた。

大広間に五人が集って宴会というのも格構がつかないと思って、私は憭さんに「おい、あまり広い座敷より、もっと小さい部屋の方がいいじゃないか。」と言ったら「じゃ、こっちにしよう。」と、庭の見える十帖間ぐらいの部屋に移った。

太宰先生もやっと落ち着いたという風に、庭に目をやり

「好い庭だね。よく手入れが行き届いている。」

と暫らく庭の木々を眺めていた。

その部屋にお膳が運ばれてきた。津軽塗りの高足のお膳で、昔模様のお皿、流石旧家の調度品である。

私は、「飲む前に、珍らしい物を見せてくれたら。」と言うと、憭さんは、別の部屋から新聞紙に包んだ棒状のものと、ボール箱に入れた品を持って来て、太宰先生の前に置いた。

何が出てくるのかと思って一同は、固唾を呑んで見守った。憭さんはおもむろに棒状の物の新聞紙を取り外した。

出てきたものは、中の物は「ステッキ」。それも「山かがし（蛇）」の皮でスッポリとくるまれた、美しいステッキでした。

「うわぁ、山がじ（山かがし）だっ。」利幸君は、先ず声をあげた。

「うん、キレイなステッキだね。でも気味が悪い。」

薫さんは

「先生、散歩の時、これを持って歩いたら……。」

「いや、遠慮するよ。とても美しいステッキで、誰も手に入れることが出来ない逸物だと思うが、僕は遠慮するよ。」

次に箱をあけたら、中からは、「山かがし」の皮の鼻緒の桐の下駄でした。

「うーん。これもキレイだ。革の鼻緒というのは、下駄でも草履でも沢山あるが、蛇の皮の鼻緒は珍らしい。でも、これを履いたらモゾモゾして歩かれないだろう。折角だけど、これも

御遠慮申し上げる。」

憭さんは、「残念だなぁ」と言って手早くステッキと下駄を片付けた。

それから宴会に入った。

酒は「津軽の文化酒」であり、手製の山ブドウの液。御馳走も鯉の洗い、鯉こく。じゅんさいの酢のものなど、他は忘れたが、鯉もじゅんさいも自宅の屋敷内にある池に養殖していたもののようだった。

飲むほどに、酔うほどに、何か歌をとの声が出て、『原田憭作曲、山中正津作詞』の曲が、憭さんのギターで演奏された。これは前からの打合せで、太宰先生に聴いてもらおうというので、何回も練習したものである。

太宰先生は、「うん、これは好い。好いぞ、好いぞ、曲が好い！」

と褒めてくれた。

「それじゃ僕も一つ唄おうか。」

〈ストトン　ストトンと通わせて
今更　厭とは　胴欲な
厭なら　厭だと　最初から
言えばストトンと通わせぬ
ストトン　ストトン
〈好いて好かれて相惚れて
一夜も添わずに死んだなら
妾薬種の花となる
あなた蝶々で飛んでおいで
ストトン　ストトン

と歌い終って自ら拍手した。手拍子をとっていたみんなも拍手した。

「ああ、今日は愉快だった。蛇皮のステッキはご辞退したが、このようなもてなしを受けて、とても楽しかった。ホントに今日はありがとう！」

憭さんとお母さんは、門のところまで出て見送ってくれた。

中柏木の集落は、本村の嘉瀬より古くから開かれた村である。昔、原子（旧七和村、現五所川原市）から小泊岬までの道、下の切道（山岸道）が通っていた。現在の道路である。

その道を、津鉄嘉瀬駅に向って歩きはじめた。

村はずれの坂を下りて、両側が田圃になり、大きくカーブして嘉瀬に入りまた緩い坂になっている。

その坂をゆっくりゆっくり上りながら、先生は

「君、神経衰弱になったことがあるかい？。」

「ハイ、若い頃夜眠れなくて睡眠薬を飲んだりした事があります。」

「ハハハハ。若い頃と言ったって、君は二十歳ぐらいだろう。まだ若いじゃないか。」

何故、突然そんなことを言ったのか、私は不思議に思った。

（その頃は、太宰治の前歴を全く知らなかったので、何回か自殺未遂をしていることなど承知していなかった。）

坂を登り切ったところで、

「なあ、戦後の華族は。――――没落した貴族は惨なものだよ。なあ。」

私には、先生が何を言おうとしてるのか、何を考えているのか全然わからず、唯、あいまいに「ハァ……。」としか言いようがなかった。

「時間は大丈夫か？」

「ハイ、大丈夫です。近道を抜けるから。」

途中で立小便をしていた薫さんと利幸君も急ぎ足で追いついてきた。

嘉瀬小学校の正門を右に見て、すぐ線路が近い。線路脇に建つ民家の軒下を通って線路を渡り、プラットホームに上り、出札口から待合室に入った。

間もなく下りの汽車が入って来た。

「今日は、ありがとう。嘉瀬はいい所だ。また来ますよ。」

二人にちょっと右手を上げて微笑（ほほえ）んで見せて、先刻入ってきた改札口からまた出て行き、金木行の汽車に乗り込んだ。

後日、先生から憭さんへは、次のような書が贈られた。

思ひ　煩ふな　空飛ぶ
　　鳥を見よ
播かず　刈らず
蔵に収めず

マタイ傳　太　宰　治

▽ て・に・を・は

太宰先生が疎開していた〈源（ヤマゲン）の離れには二度ほどお邪魔した。木立さんの後にくっついて行ったのである。

その時も、「津軽の文化酒」一本風呂敷に包んで、〝八ツ目うなぎ〟と川蟹を五はい（匹）ほど。小さな手篭に入れ、私は持たされ太宰先生を訪れた。

「ヤァ、よく来てくれた。近ごろムシャクシャしていたんだ。サァ、サァ上って……。」

「珍らしい物が手に入ったのでー。奥さん、川蟹を喰べたことがありますか？。」

奥さんは、「サァ？」とちょっと首をかしげたが、喰べたことがあるとも、ないとも言わず、小さな手篭を受取った。

部屋の隅には、本が山積みされていた。講談社やその他から送られてきたと思われる郵便物なども積まれてあった。

三人の間に、津軽の文化酒が一本でんと立てられ、二寸ほどに切って皿に移された〝八ツ目うなぎ〟と湯呑み茶碗が持ってこ

られた。

ひと口「グーッ」と飲んでから、先生はこんな話をはじめた。

「一昨日（おっとい）厭な奴が尋ねて来てね。小学校の同級生だと言っていた。『おい、津島。お前の所にはウイスキーがあるだろう。いっしょに飲もうよ。ケケケケ……。』と甲高（かん）声を出して笑いやがって、とうとうブランデーを一本出させ、ほとんど彼が飲んでしまった。

ー早く帰ってくれればよいと思って、どんどん注いでやると、『修活、遠慮しないでお前も飲めよ……。』だって、誰の御馳走だと思ってるんだろう。」先生は、その場面を思い出したように、顔をシカメめて、

「それから、昨日も、今日も、先刻までムシャクシャしていたんだ。

ー君たちは、よく来てくれた。」

先生は、気持が直ったようで、木立さんといろいろ話に花を咲かせていた。

ふと、私に気がついたように

「あ、君。今日出版社から送られてきた本を進呈しよう。」

部屋の隅にうず高く積まれてある中から一冊の単行本を取ってきて、扉を開き、太い万年筆で

「謹呈　太宰　治　」

と書いてくれた。その単行本の標題は〝玩具〟でした。

「ねぇ、文章を書くには、〝て・に・を・は〟が大事なんだ。」

私は、「ハァー。どうも。」と言ってその単行本を受取ったが、〝て・に・を・は〟とは何なんだろうと思った。

私は家へ帰ってから〝玩具〟を隅から隅まで読んだが、〝て・に・を・は〟の意味を理解することができなかった。

文法を習った事もない私は、太宰先生が「文章を書く時は〝て・に・を・は〟が大事なんだよ。」と言った言葉がどうも気にかかった。

何か文を綴る時、ふとこの言葉が頭の中をよぎる。しかし、はっきりと解らないまま五十年の年月が過ぎ去った。

平成七年十月一日から十一月十二日までの三十四日間を会期に、青森県近代文学館では、特別展「太宰治」を開催した。生前の太宰治を知っている一人として、疎開中の太宰治を六百字程度で書いてほしいとの依頼があり、〝盲蛇（めくらへび）に怖（おじ）ず〟の例えの如く、怖いもの知らずで私は原稿を提出した。

後日送られてきた図書券を利用して〝大辞泉〟を購入した。

『あった。』――――て・に・を・は［天・爾・遠・波］が大辞泉に載ってあった。

五十年の胸のつかいがスーと下りた感じがした。太宰先生は五十年の年月をかけて私に教えてくれたのである。

▽冬の花火

木立さんから連絡があった。太宰先生が、嘉瀬の文学愛好グループのために、新作を披露してくれるというから、会場と参加者の手配をするようにとのこと。早速、私は澤田薫さんや二～三の仲間に相談して、会場を嘉瀬青年学校の教室を借りることにした。

私は青年学校に飯塚貞雄校長を訪れ、太宰治の朗読会をやりたいから教室を貸してほしいと頼みに行った。

飯塚校長は、「太宰治のお話は私も是非聞きたい。校長室を使ってもよいから、日時が決ったら私にも教えてくれ。」と快諾してくれた。

当日集ったのは、薫さんの記憶と合わせて次の方たちが思い浮かぶ。

飯塚貞雄、木立民五郎、鳴海浄、小山内嘉一郎、澤田薫、花田松義、神島みや、原田憭、山中利幸、私と太宰先生とで十人ほどだった。

私と利幸君は、嘉瀬駅に太宰先生を迎えに行き、青年学校の校長室に案内した。

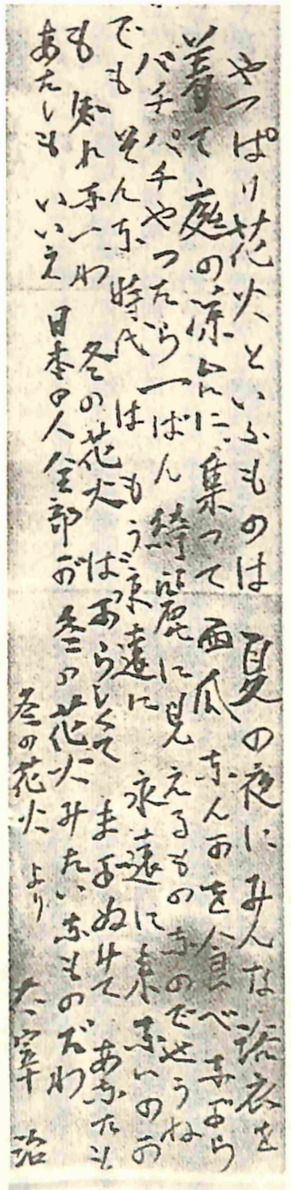
既に集っていた人々は立上って迎えた。木立さんから飯塚校長へ太宰先生を紹介し、太宰先生は集っているみんなにも軽く会釈した。

お茶を一服喫した後、木立さんの司会ではじまった。太宰先生は椅子から立上って、

「これは、私がはじめて書き上げた戯曲です。雑誌社へ送る前に皆さんにご披露し、批評をいただきたいと思います。題は〝冬の花火〟。」

私たちは、緊張してじっと耳を澄まして聞き入った。大分長い時間だったようでもあり、このような朗読を聞くのは初めての私は、先生の朗読の中で、あるいは男の声になり、女の声色を出したり芝居じみた台詞にしっかり感心してしまい内容はどうなのかさっぱり頭に入らなかった。ただ、題の〝冬の花火〟について、花火は夏の季節のもの。それが冬の花火とは、〝嘉瀬と金木の間の川コ〟みたいな逆説的な内容なのかなぁ、と思ったが口には出せなかった。

先生は、読み上げながら着



物の袖から白いハンカチを出し、鼻の頭を拭いて、幕の合間とでもいうか。次の章に入る前にお茶を飲み口のまわりを拭い、また朗読を続けた。

朗読は終った。先生は、額に二・三度ハンカチを当て、それからみんなの顔を眺め廻した。「ひとつ、みなさんの批評を！」

誰も一言も口を開かなかった。暫らくして木立さんから「先生、戯曲は、これからも書くんですか。」「そうだね。冬の花火の反響を見て、また書きたいと思っている。」飯塚校長は、「いや、先生の初めての戯曲だという作品を、しかも読者の誰よりも早く私たちに読んで聞かせてくれたことは。本当に光栄です。有難とうございました。」

集った人々は、批評と言われても、それぞれの頭の中で整理がつかず、ただ感激に浸っていたのだった。

後日、戯曲〝春の枯葉〟も雑誌社へ送る前の朗読会が開かれた。

▽津惣と山源

この話はどこで聞いたのか忘れたが、おそらく木立さんのりんご園で鶏鍋をつつきながら、津軽の文化酒を酌み交わしての事ではなかったろうか。

太宰先生は、「ボクは嘉瀬が好きだ。木立さんはじめ、若いグループと話し合っていれば、とても心が安らぐ。」こんなことも言っていた。

そして、「嘉瀬は、ボクの曽祖父惣助の出た村だ。山源の身代は、惣助が汗水流して築いたものだ。〝津惣〟といった時代、行商をしながらコツコツと身代を殖やしていた惣助。その身代を基に政治家となり、権威の象徴として大邸宅を建て、〈源の名を近隣に轟らかした父源右衛門。ボクは、惣助が好きだ。」

私はこの頃は、津惣も知らないし、能久から何代か前に〈源へ婿に行った人があり、その関係で、山中賢作さん（故人）が、嘉瀬において〈源の大作人であった事ぐらいしか知らなかった。

太宰先生は、労せずして財と権威を手に入れた父源右衛門を非難しているように、私には聞こえた。

後年私は町役場に勤めるようになってから、何度か朝日町にある津惣三代目津島惣助が建てたという家を見に行った。明治時代に建てられた家として大きなものだった。総ヒバ材で総二階建てというのは商家の造りなのだろう。明治時代の一般住宅は平家建てがほとんどで、二階建てといえば商家か、旅館、料理店などに見られるだけである。その時は町教育長の福士勇さん（故人）の住宅になっていた。

その頃は、〈源とは言わず津惣と呼ばれていたのだろう。源右衛門の代になってから屋号を〈源と呼ばれるようになり、金木の殿様と言われるようになった。太宰先生は、何かそれに反発しているように私には感じられた。

▽ローマ字

「先生。先生が四・五日前にお嬢さんと一緒に家の前で日向

ぼっこしていたのを見ましたよ。」
「そうか、声をかけてくれればよかったのに……。」
丁度自転車で通りかかった私は、赤レンガ塀の前に先生と娘さんが佇んでいたのを見たのである。そして先生は、娘さんを抱くように腰を低く下げ、道路の向い側の銀行や警察署の方を指差して、何かいろいろお話していた。（註、当時金木警察署は現みちのく銀行金木支店の所にあった。）それがとても子煩悩で、目の中に入れても痛くない、というふうに私の目に移った。
「でも、あまり楽しそうにしていましたから、声をかけられませんでした。」
「まあ、今度は金木に来れるか、どうかと思うので、娘に父のふるさとのことをいろいろ教えていたのさ。――うちの娘は物覚えが良くてね。教えた事はキチンと頭に入っているようだ。まだ五歳だというのにローマ字なんかも全部読み書き覚えてしまっているんだよ。」
私は驚いた。私の小学校の頃は、戦時中で、ローマ字などは敵国語だというので習った事もないし、A・B・Cなど言う事も禁じられていた。
終戦なった今、五才の幼女がローマ字二十六文字読み書きが出来るなんて、やはりご両親が最高の学校を出てるだけあって凄いものだと思った。
娘のことを話す先生は、もう可愛いくて、可愛いくてどうしようもない親バカチャンリンの、頬がゆるみっぱなしである。
先生は、金木の町が自分のふる里であり、そのふるさとを娘に伝えようとしている心情がひしひしと感じられた。

▽門弟帳

これも木立宅の二階での会話です。
木立さんが何かの用事で階下へ降りて行ったとき、太宰先生は、
「木立さんは、やはり政治家だね。文学好きでその才能もあるようだが政治家の方が似合っているよ。うちの文治兄さんも、本当は文学をやりたかったと思うんだ。早稲田文学に書いたりしていたもの、だが、父が死んで政治家にならざるを得なかった。人生は思うようにゆかないもんだね。」
私は、先生のシンミリした言い方に戸惑うた。それで話題を変えるように、「先生。先生には弟子が何人くらい居るのですか。」と聞いた。
「弟子？。（ひと息ついてから）弟子なんてないよ。僕もまだ修行の身だ。自分の小説を書くに必死だもの……」
窓の外をじーっと見つめていたが、
「ただ、作品を見てもらいたいという人たちは何人か居るね。熱心なのは田中英光、この人の小説はいいよ。スポーツマンで、オリンピックにも出た人だ。それから津軽では小野才八郎だ。下（しも）の方の薄市か今泉かの小学校の先生をしている人だ。」

（注＝自分の住んでいるところより北の方を下（しも）と呼び、南の方を上（かみ）というのが風習だ。）
もっとあるのかも知れないが、この時名前を挙げたのはこの二人だけであった。数人の名前が出てくれば、今丁度墨を摺（す）っている最中だから門弟帳を作って、それに先生に書き込んでもらおう、そして最後にちょぺっと私の名前も書いてくれるように頼んでみようかなぁ、と大それた考えを持ったが、二人だけの次に作品の何もない私の名前は並べられるわけはないし、断念した。よって太宰治の門弟帳はこの世には無い。

▽芸術とは

これも、五十年前に発行した〝灯〟第十六号から引用しよう。

『芸術家　　汀美空

これは愚問でせうか。恵介は、某作家にこんな問を発したのです。
「先生、小説家なども芸術家と云われて居りますね。いま、世間では無やみやたらに、文化だとか、芸術だとか云われて居りますが、芸術とは一たい何を云うのですか。わたしにも芸術と云う意味はわかるのです。けれども、それぢゃ説明をしなさいと云われれば、何んと云ってよいかわからないのです。ね。先生、教えて下さい。一口にわかるように、又誰にでものみ込めるように教えて下さい。」
夏でした。村の東にある小高い山（村人は観音様の山と呼んで居ります。）で、文学愛好者が十二名程集って、疎開中の某作家を囲んでの座談会でした。
某作家はそれが癖かのように、しきりに白いはハンカチもて鼻の頭をこすりながら「フム、フム」と二・三度うなずいていたが、ちらと恵介の方を見て、袂からピースの箱を出し、
「そうですね。芸術とは目に見えないものですよ。その目に見えないものを目に見えるようにし、また、耳に聞こえるようにするのが芸術家の仕事なのです。たとえば、こんな話があるとします。
難破して、自分の身が怒濤に巻き込まれ、海岸にたたきつけられ、必死にしがみついたところは、燈台の窓縁でした。やれ嬉しや、と助けを求めて叫ぼうとして、窓の内を見たら、いましも燈台守の夫婦とその幼い女児とが、つつましくも仕合せな夕食の最中だったのですね。ああ、いけない。と男は一瞬戸惑った。迷惑しちゃったのですね。たちまち、どぶんと大波が押しよせて、その内気な遭難者のからだを一呑みにして沖遠く拉し去った。とまあ、こんな話ですね。遭難者は、もはや助かる筈はない。怒濤にもまれて、ひょっとしたら吹雪の夜かも知れないし、ひとりで誰にも知られず死んだのです。その時、一声、たった一声叫べば遭難者は助かったのかも知りません。しかし、遭難者は燈台守親子の仕合せをこわしたくなかったのです。勿論燈台守は何も知らずに、一家団らんの食事を続けていた

に違いないし、もし大雪の夜だったら、月も星も、それを見ていなかったわけです。結局誰も知らない。事実は小説よりも奇なり、なんて云う人もあるようですけれども、そうです。誰も知らない事実だって、この世の中にあるのです。しかもそのような、目撃されていない社会の片隅に於て行われている事実にこそ、高貴な宝玉が光っている場合が多いのです。それも天賦の不思議な触角でさがし出すのが芸術なのです。芸術の創造力はその中に表彰されている事実よりも、さらに真実に近いのです。」

と止め、左手にタバコを持ち換え、ハンカチで鼻の頭をこすり、指もて軽くタバコの灰を叩き落し、また語をついだ。

「若い二人の姉妹があるとします。この二人の娘さんは寝ながらどんなことを話し合っているのでせうか。よし、それぢゃ、今夜は一つあそこの家へ忍び込んで行って、この二人の姉妹達の会話を盗み聞きしよう。なんて、いくら心臓な作家でも、そんなことは出来ませんね。仮にぬき足、さし足で忍び込んだとしてですね、目的の姉妹達の部屋の襖のかげに息をひそめて、聞き耳を立てている所を、誰だぁッ！と、その家の親父にみつかって怒鳴られたらどうするね。直ちに住居侵入罪で挙げられてしまいますよ。でも御安心下さい。作家はそんな夜這いの真似みたいなことをしなくても、机の上にのせた原稿用紙には、彼女達の会話が一ぱい書き込まれますから。　』

昭和二十一年の秋、太宰先生が新作を雑誌社へ送る前に、嘉瀬の文学グループへ披露したいとの連絡を受けたので、私は直ちに〝灯〟の仲間を嘉瀬観音山へ、「太宰治先生を囲む会」ということで集めた。

いつものように、先生は津鉄の嘉瀬駅へ午後二時ごろ着く汽車で、着流しの素足に下駄ばきという姿で降りてきた。

利幸君と私は駅から観音山へと先生を案内した。標高六〇米ほどの低い山だが、砂利道を下駄ばきでは少しこたえた様子、途中袂からハンカチを出して数回顔の汗をふいたりしたが、どうにか頂上までたどり着いた

秋晴れの天高く澄み渡った空の下、十人ほどの仲間が芝生の上に車座になり、私たちを待ち構えていた。

「あぁ気持ちが好い。ここまでくるにはちときつかったけれど、景色の良いところだね。金木は、あっちの方向か？。」

「はい。そのずーと向こうに権現崎が見えます。」

先生は、観音山がとても気に入った様子だった。

その日発表された作品名は〝トカトントン〟でした。集まった者の中には自分にも思い当たる節があるかの如く、うなづいてみたり、これは青森から浅虫への道だね。と云ったりする者もあったが、先生は肯定も否定もしなかった。〝トカトントン〟金槌の音、そんな幻聴は誰にも感じられたことがあったようです。

「今、先生が朗読してくれた〝トカトントン〟以外でも、質問

のある方はどうぞ！」

そこで前掲の「芸術」についての質問が出たのである。

先生の気に入った嘉瀬の観音山へも、この時一度きりで、また登る機会はありませんでした。

▽　最初で最後のさよなら

私がはじめて太宰先生を知ったのは、昭和二十一年の二月でした。

戦後初めての衆議院議員の選挙に文治先生も立候補するということで、準備が進められていた。或る日、山源の二階には北郡下の各町村の青年代表（青年団長とかリーダー達）が集められた。その時木立民五郎さんは、日本進歩党北津軽郡青年部長で、当然その代表達の中心的役割を果す役目についていた。その集会にも自分個人だけでなく、部下を何人か引き連れて参加したのである。その中の一人である私も、山源の大邸宅に入るのは初めてである。しかも洋風の手すりのついた階段を恐る恐る上って行った時は胸がドキドキした。

広い部屋には既に十人以上の青年達が集っていた。正面の床の間を背に文治先生が座っており、その隣りに三和精一県会議員（後の代議士）がその場の進行係を務めていた。「おい、青年部長、遅いぞ！」とダミ声を上げた。木立さんは「遅くなりました」。とあいさつして自分の腕時計をひょいと見たが、定刻前の様でニガ笑いをした。文治先生は、鷹揚にうなづいただけだった。私は部屋に入った時、ちょっと異様に感じたのは、入るとすぐ左側の隅に和服姿の人物が、何かその場には馴染まないという感じで座っていた。私は会議の内容よりもその人の事が気になった、ひょい、ひょいと窺い見た。その人は唯無言で、鉈豆煙管で刻み煙草を吸っていた。それも休みなく。細い長い指は、左手の中指、人差指、親指と黄色く染まってしまっている。この人は一体どんな人なんだろう、会議に参加しているならば座が離れすぎているし、だからと云って全然関係のない人はこの部屋には居る筈がないし、何回目かのひょいと見た時は、まるで煙の消えたようにその場から消えていた。

会議は一時間ほどで終った。武田村（現中里町）から新岡精弥、五所川原町から今勝司ら、各町村の青年指導者の熱気溢れる議論も、結局は三和県会議員のシナリオ通りに、文治先生の演説会場での警備・ヤジ対策を決めたようである。

帰り道、木立さんは、「今夜のあの部屋の入口の隅に居た人を知ってるか。」と云われたので、私は「知らない。何だか不思議な人だと思った。」と答えると、「あの人が小説家の太宰治よ。山源のオンチャマで、本名は津島修治。文治先生の弟だよ。」私はその時は、本物の小説家に会ったという感動はしなかった。太宰治の名も津島修治の名もその時はじめて聞いた名前だったからです。

それから数日経って、弘前の本屋まで出かけ〝右大臣實朝（増進堂発行）〟〝八十八夜（南北書園発行）〟〝新繹諸国噺（生活社刊）〟

など買い求めて来た。また、河北新報や東奥日報に〝パンドラの匣〟という新聞小説に太宰治の名があったことを思い出したりした。

〝思ひ出〟や〝魚服記〟を読めば、金木の町や喜良市の藤の瀧などが書かれてあり、ようやくわが隣町に「太宰治」という作家が実在していたんだ。そして山源の二階でその作家をこの目で見たんだという感動がひしひしと湧いてきたのである。

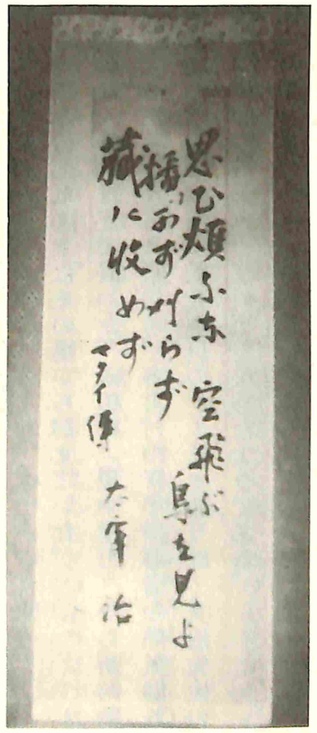
それから木立さんのお供で何回か太宰先生の疎開していた山源の離れにお邪魔し、嘉瀬にも何度も来てもらったが、別れは何時も「ぢゃ、また……ネ。」という風で「さよなら」とは決して云わなかった。

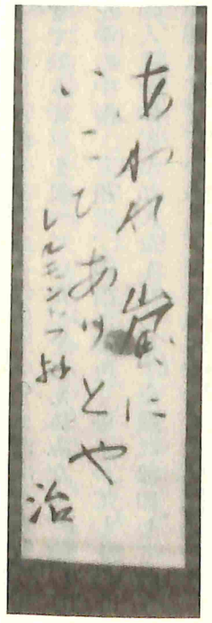
十月の末だったと思う。木立さんから「太宰先生は、来月中旬に東京へ帰るそうだ。記念に何か書いてもらおう。」と誘いが来たが、私は丁度その日、陸軍少年飛行兵で同期の秋田県能代市の友人を訪れる約束があった。木立さんは、原田憭さん、山中利幸君を引き連れて揮毫を頼むに行ったのである。その時書いてもらったのは、

やっぱり花火といふものは　夏の夜にみんな浴衣を
着て　庭の涼台に集って西瓜なんかを食べながら
パチパチやったら一ばん綺麗に見えるものなのでせうね
でも　そんな時代はもう永遠に来ないのか
も知れないわ　冬の花火　ばからしくてまがぬけてあなたも
あたしも　いいえ日本の人全部が冬の花火みたいなものだわ
冬の花火より　太宰　治

待ち　待ちて　ことし咲きけり
桃の花
白と聞きつつ　花は紅なり
治

男児華生気機一髪
治





この外にも、当時の金木郵便局長津島脣輔氏にも書き与えたと云う。

昭和二十一年十一月十二日、木立さんと私は津鉄嘉瀬駅のホーム

ムに立っていた。マッチ箱のような客車を引っ張った時代物の蒸気機関車がホームに入ってきた。太宰先生は窓から顔を出して私たちに合図した。木立さんと二言、三言何か話をした。私は、配給の進駐軍からの放出物資の缶詰二個を汽車の窓から差し入れた。やがて列車は、ガッタンと音を立ててゆっくり動き出した。奥さんは内側の席から頭を下げていた。先生は窓から手を出して振り「さよなら」と云った。最初にして最後の「さよなら」である。

木立のりんご園へ行くため、原田憭家へ行くため何度か歩いた線路を列車は黒い煙を吐き出しながら遠ざかって行った。

▽ 屋号　能久について △

太宰治が嘉瀬に来る度毎に「うちの曽祖父は嘉瀬から出た人だ。」と云うていたが、その曽祖父三代目津島惣助は婿養子になる前の名前は山中勇之助、嘉瀬の山中久五郎の弟である。

嘉瀬村二七二番戸に居を構える山中家は代々久五郎を名乗り、屋号を「能久（のっきゅう）」と言った。

今まで太宰治についての関連記事で、嘉瀬の「能久」について「津島家の人びと＝朝日新聞青森支局」は「野久」と書き、「回想の太宰治＝津島美知子」は「乃久」と表している。

私が「追憶・太宰治断片記」を書くに当り、勇之助の出た嘉瀬の山中家の屋号が、「野久」「乃久」と異なった表わし方をされているのは何故か、と思った。そこでこういう「能久」もあるのではないか、根拠は、山中家の先祖は能登の国（石川県）からの落武者とされている。『大先祖は山中山城守長俊近江六人衆の一人で、武将柴田勝家に仕え、能登国山中庄中城主であったが、勝家が天正十三年羽柴秀吉（豊臣秀吉）に敗れるに及び、山中一族も四散、一族中のものが船路により佐渡・羽前・羽後と逃れ、天正の末期陸奥国馬の郡飯積（飯詰）に到着し農耕に従事していた。慶長元年の頃一族のうち二家族は嘉瀬村に、一家族は蔵舘村（大鰐町）に移住し、うち一家族は飯積に残ったという。嘉瀬山中一族の家紋は「抱き茗荷」であり、近江源氏佐々木氏流と考えられる』（金木郷土史より）